

しわぶき

矢野陽子

・よすがとして残るのは
しわぶき 一つ

梨園の奥方を思わせる

端正な容姿に似ず

度々耳にしていた

大きなエヘン エヘンと

母の空咳ばらい

喉の奥がからまるのだろうか

何時の頃からだろう

私のしわぶきの中に

母と同じ音色 同じ響がある事に

気がついたのは……

電話でよく

「声がお母さんに似て来たわね」と言われた還暦を過ぎた頃
からだろうか

年を増す毎に しわぶきの中の

似ている音色 響は強くなっていた

今 母亡き後 七年が経つ

生前の〃現身〃の母を思い出す

静かな気配の中

新たまつてしわぶき一つ する

甦えってくる

懐かしい母の 私と同じ音色 響

母は生きている 私の中に

しわぶきをする度に
在りし日の母の姿が

まぶたに浮かび上がってくる
台所に立って

小気味よい音を立てて

大根を刻んでいる

高校時代

母に習って

包丁を使い始めた私

毎朝味噌汁の具を刻んだ

私の料理始めの

大根の千刻り

その母はもういない